

## 地域通貨の実践

出版：岩波書店

著者：西部忠

- どんな種類があるのか 担当：前澤（P36～42）

### ◇ 通貨の価値基準

地域通貨は価値基準を労働時間にリンクするか、国家通貨にリンクするかで分けられている。前者はボランティア、教育などの人的サービスに限定されているため、サービスをほぼ一律に評価する。後者は食品などのモノが対象で、価格付けを当事者間の自由な交渉に任せているケースがほとんどである。

### ◇ 通貨発行方式

#### 1. 紙幣方式

・発行委員会が独自のデザインやメッセージを印刷した紙幣を発行し、それが人々の取引を通じて転々と流通していくタイプ。通貨発行は「集中発行方式」。

例 イサカアワー、おうみなど

・仕組みは、運営団体が「提供できるモノやサービス」、「提供してほしいモノやサービス」を参加者から募り、内容の記載されたリストを配るとともに、一定額の紙幣を配る。参加者はリストを見て必要なモノやサービスを探し取引を行い、対価として紙幣を支払う。

・メリット：運営に手間がかからない、不特定多数の人が利用可能

・デメリット：流通範囲が広がることで偽造が発生する、発行量の調節が困難

#### 2. 口座方式

・紙幣を発行せずに、参加者が各自残高ゼロから出発の口座を持ち、モノやサービスを提供した際は黒字、提供してもらった際は赤字を記帳していく方式。通貨発行は「分散発行方式」。

例 LETS、ピーナッツなどで世界的に最も普及している

・口座方式以外にも、モノやサービスを提供する側、提供してもらう側双方が自分の通帳に品目と取引額を記帳し、お互いにその内容を確認しあう「通帳方式」や、モノやサービスを提供してもらう人が小切手に品目と金額を記入し、登記人に元帳に記録してもらう「小切手方式」がある。

・LETSの特徴は、参加者の取引で黒字と赤字が多角的に決済され、常に口座残高の合計がゼロであるということ（ゼロサム原理）。

・メリット：口座に赤字を持つことができる、コミュニティが構築しやすい

・デメリット：記帳や残高の集計管理が煩雑である

### 3. 手形方式

・モノやサービスの提供を受けた個人が自ら新たに手形を振り出すか、第三者から受け取った債務証書に裏書きして使うかといったやり方で取引する方式。通貨発行は「分散発行方式」。

・手形方式では、初めに振り出されてから裏書きを重ね、最後に振出人の元に還流して初めて精算される円環型決済システム。

・メリット：赤字が持てる、遠方との取引可能

・デメリット：モラルハザードが起こる可能性が高い

・これらの方式にはそれぞれメリット、デメリットがあり、地域ごとの導入目的に応じていずれかの方式を採用して地域通貨を利用している。

#### ☆ 感想

地域通貨にもいろいろな方式があることを知り驚いた。個人的には現金に似た感覚の紙幣方式が良いと思ったが、電子マネーによって短所克服ができる口座方式のほうが現代には合っているのかなと思った。

#### ● 円やドルには換金できない 担当：林 (P42~48)

・地域通貨の大原則として、円やドルに換金することはできない。

→換金した場合は紙幣方式・口座方式のどちらの場合も発行残高が減少。

→流通が妨げられる。

もし仮に換金されたとしたら、それを発見することは難しい。

・多くの地域通貨は、地域通貨の価値と国家通貨の価値とを1対1でリンクしているが、その価値が1対1であることを保証するものではない。

[近年登場、カナダの国家通貨に兌換交換可能な仮想通貨：トロントドル]

・交換時、9割が国家通貨、1割が寄付金となる。

→利益率が高い商売では、換金した際の1割の寄付金は苦ではない。

→利益率が低い商売では、換金した際の1割の寄付金は苦である。

・兌換により、流通量が増減したかははっきりとは言えない。

地域通貨の本来の目的である地域の「経済」や「コミュニティー」を活性化させるという点については少しずれている。

#### ● モノやサービスの値段の決め方

・日本の多くの地域通貨は円を併用すること前提にしている。

→円と地域通貨の混合割合は提供者が各自で決める。

→どの程度地域通貨に関与するか参加者自身が決定でき、無理なく販売可能。

<円の市場>

・匿名的な経済主体が価格を通じてのみ情報を伝達するような市場。

- ・円などの普通のお金は経済的等価を交換の基準とする。
  - 功利的な計算や損得勘定が支配的になる。
  - 売り手間、買い手間の競争が激しくなり、「一物一価」に向かう傾向が強い。

#### <地域通貨の市場>

- ・何らかの価値や共通性に基づいて参加している者同士の市場。
  - 値付けに様々な要素が入り、「一物多価」が普通になる。
  - 個人が自信の関心や価値観に基づいて自由に多様な価値づけを行える。
- ・地域通貨は貯蓄や儲かるためのお金ではなく、ほかの参加者とできるだけ多くの取引をし、互い支えあっていることを実感するためのお金である。
  - 「経済人」としての合理的行動が発生しにくい。
  - お金や市場についての無意識的な感覚や行動が少しずつ変化し、いずれ値付け行動にも変化が現れるときがくる。

#### ● コメント

- ・地域通貨を使い続けることは一筋縄ではいかないことが分かった。
- ・端的に取引に行われる市場が当たり前だと思っていたが、互いに支えあいながら取引する市場があることを再確認することができた。

#### ● 「ただ乗り」への対処 担当：下川（P48～56）

##### ○ 「ただ乗り」とは…

- 赤字を持つことができる口座方式や手形方式の地域通貨において、参加者が大きな赤字を残したまま退会、もしくはいなくなってしまうこと
  - \*単に大きな赤字を持っているだけでは「ただ乗り」とは言えない
  - \*赤字に返済期限がないため、早かれ遅かれ赤字を埋めればいから

##### ○ 「ただ乗り」の抑止力

- 顔の見える友人や隣人間では発生しにくい
  - 一度「ただ乗り」をするとコミュニティでの信頼を失い、そのコミュニティで他の人々とうまくやっていけなくなるから

##### →情報公開の原則

- 誰が赤字を累積しているか知ることができるため、累積赤字保有者にモノやサービスの提供を自己抑制できるから

##### →赤字の限度額を決める

- 限度額を決めておくことで、過剰な赤字累積を防ぐことができる

##### ○ 「ただ乗り」を完全に無くすことは不可能？

- 「ただ乗り」をした場合のリスクを背負えば、できないこともない

- 町の経済をよみがえらせた地域通貨
  - 地域通貨が町の経済をどう変えたのか…
    - スタンプ貨幣による需要創出効果により、町の経済は急速に復興した
  - 大恐慌時の地域通貨
    - 地域通貨は町の経済を活性化する方法としての意義を認められていた
    - 財や国家通貨を担保にして比較的小さな町に導入されたスタンプ紙幣はかなりの成功を収めた
  
- 企業やNPOも参加できる LETS ～コミュニティ・ウェイ～
  - LETS とは…
    - 個人や個人事業主が取引を行うシステム
  - コミュニティ・ウェイとは…
    - 企業やNPOも参加できる LETS の発展型コミュニティビジネスモデル
      - \* LETS に参加する企業や個人が NPO の事業や活動を支援することにより、NPO が必要な地域通貨や現金の資金調達を行い、同時に、地域通貨の地域内循環を促進する仕組み
  
  - コミュニティ・ウェイの利点
    - 企業にとっての利点
      - ・現金がなくともコミュニティを援助し、地域経済を活性化し、顧客の認知と愛顧を得られる
    - 住民にとっての利点
      - ・単なる現金の寄付ではなく地域通貨との交換になり、それで地場企業から製品やサービスを購入できる
      - ・賛同する NPO やプロジェクトを支援することにより、自分の意思を明確に表示することができる
    - NPO にとっての利点
      - ・活動や事業のための円と地域通貨、企業からの製品やサービスを調達できる

#### コメント

- ・「ただ乗り」を防ぐために、コミュニティのつながりがとても大事だということが分かった。
- ・恐慌時、経済を復活させるのに有効な地域通貨はスタンプ紙幣であり、ものすごく循環のスピードが速いことに驚いた。

- ・コミュニティ・ウェイは個人、企業、NPOの一部でなく、全体が得する制度になっていて、画期的だなと思った。

◆経済活性化以上の効果 担当；橋本 (p.56~62)

- ・地域通貨は、社会や政治をも変える仕組みとして利用可能  
新しい生活・文化の拠点づくりにも役立つ
- ・公共プロジェクトの選択に関する意思決定にも応用可能なコミュニティ・ウェイ
- 【現状】納税や電力会社に料金を支払っても、その投資先を指定できない  
→住民が直接的に公共性の高いプロジェクトの決定に参加可能
- ・〈PFI〉は、「小さな政府」や「民営化」といった行財政改革の一環として九二年にイギリスで導入されたものであり、市場原理を導入することで政府部門を縮小し、公的事業の効率化を図ろうとするもの。  
市場の効率性を前提に「公」(政府)→「私」(市場)へ転換する方法  
⇒〈地域通貨〉は、貨幣・信用システムを「コモンズ(共有地)」として再生し、互酬的交換を行うための新たな地域市場の形成を目指すもの。  
「共」の創造により、「公」と「私」の両者の関係を刷新しようとするもの
- ・地域通貨を理念や価値の表明・伝達のための文化メディアとして活用する  
ex.フェアトレード運動  
→自らの生活・文化を問い直し、積極的に作り替えていくことに繋がる

◆誰が、どうすれば、始められるの？

表2 地域通貨運営の大まかな手順 (p.59)

■運営組織の立ち上げ

- 決定すること・重点をどこに置くか(経済の活性化、コミュニティの創造)
  - ・システムをどうするか(紙幣方式、口座方式など)
  - ・単位や運営団体の名称、紙幣や通帳のデザイン
  - ・規約づくり(名称と目的、価値尺度、会員の資格、会費など)

■品目リストの提出

■会報(品目情報の)の配布

■取引相手の決定

- ・運営は定期的にバザーやポットラック(持ち寄りパーティー)を開催

■取引と支払(清算)

■取引結果の報告

- ・運営者は定期的に会報の発行(新会員紹介、会員数や総取引数などの情報提供)
- ・会員総会を開催してルールの変更を決定

## [コラム] 日本の地域通貨

### ◆栗山町「クリン」

対象地域：札幌市の南東部に位置する北海道栗山町

通貨形態：紙幣方式

特徴：取引をボランティア・サービスに限定

〈実験1回目〉

- ・250名が参加。参加者には二万クリンづつが配布され、77%の人が実際に利用。
- ・参加者のボランティア保険加入が原則

問題点「交換手帳の回収がうまくいかず取引の詳細がフォローできなかった」

「二万クリンの配布は多すぎて交換の刺激にならなかった」

「見ず知らずの人に電話で依頼しにくい」

「送迎サービスや雪かきがタクシー会社や除雪業者と競合する」

〈実験2回目〉

- ・「福祉」「子供」「環境」「地域」の4つのテーマを設置
- ・2000年9月～11月まで3カ月間にわたり実施

改善点・交換手帳を携帯しやすいサイズと材質に変更、会員に記録を取ってもらう

- ・五千クリンの配布にとどめ、「コーディネーター」を設置
- ・「エコポイント」を導入
- ・一律「サービス1時間1クリン」とし、感謝の気持ちをチップで表現

### ◆下川町「LETS Fore」

対象地域：北海道北部に位置する下川町

通貨形態：口座方式（記帳方式）

特徴：取引の公正さを保つために、赤字に関するルールを明確に決めていること

- ・基本的な仕組みはLETSと同様であり、財布に入れて携帯可能な手帳に取引を記録
- ・コミュニケーション促進とLETS普及のためのツールとして地域情報誌「ビバ！」が創刊

コメント

さまざまな目的・理念を持った地域通貨を、自分に合ったものを選び参加していくことで、自分の個性を地域通貨で複数表現することができるようになる。お金が単なる富ではなく、コミュニケーションの潤滑油にもなるのだとわかった。